

## 疱瘡 激しい症状と後遺症に苦しむ

**疱瘡 (ほうそう)** は別名・痘瘡と呼ばれた**天然痘ウイルス**による感染症です。日本では平安時代に豌豆瘡 (わんずかさ) と記されてから、たびたび流行を繰り返し、そのたびに大勢の死者が出ました。

天然痘の症状は、激しい頭痛と高熱に見舞われ、体中にできた発疹が膿疱 (のうほう=うみ) となり、やがてあばたとなって残るというものです。ワクチン療法がない時代にはこどもや妊婦が重症化して死亡することが多い病気でした。また膿疱の跡があばたとして残るため「疱瘡は見目定め」といわれ、たとえ命が助かり治ったとしても、多くの人があばたで容姿が変わってしまい苦しみました。

### 病気とどのように闘ったか

疱瘡は、一度かかれば二度とかからないということが経験的に知られていました。しかし、江戸時代までは有効な治療法がなく、一旦流行が起きれば神仏に祈り、まじないに頼りました。

疱瘡の研究が進んだのは17世紀半ばで、中国・明代の医師であった戴曼公 (たいまんこう) は日本に疱瘡の治療の秘訣を伝えました。この方法は、かかった人の唇や舌の症状を詳しく調べ、その症状から疱瘡の症状が重いかどうかを判断するもので、この教えは疱瘡流行時に実際の治療に役立てられました。

1796年にイギリスの医師・ジェンナーが牛痘接種法を発見し、嘉永2年 (1849) には日本にも伝わり、各地の医師らにより予防接種が勧められました。

### こんな人も…

奥州の武将・伊達政宗が疱瘡の後遺症で右目を失明し、独眼竜と呼ばれました。江戸時代の俳人・小林一茶は幼い娘を疱瘡で亡くし、『おらが春』でその悲哀を著しました。



『疱瘡面部伝』  
天然痘の症状を図で示した本。  
あばたの部分半立体的に塗られている。

### 疱瘡の病魔はこんな姿?



疱瘡にかかったこどもを背負って逃げる病魔